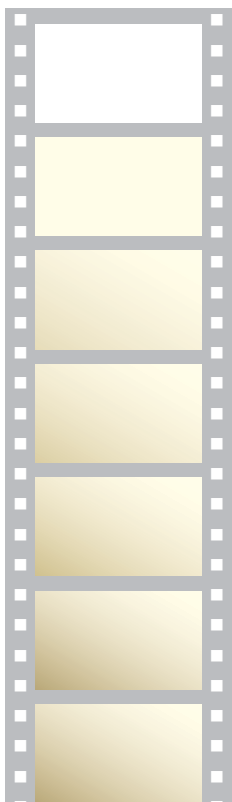


伸<sup>ノブ</sup>さんのシネマトーク

鈴木 伸夫





## 第十一回「Sさんと小津安二郎」

フィルムが焼失して40年以上たつても映画のタイトル（「乖離」<sup>カイリ</sup>）は覚えているものの、ストーリーは「若い恋人同士の話」としか覚えてないのです。ぼくたちが制作した作品が自主制作映画4本目でしたから、それ以前の映画部の歴史は何も残っていないと思っていました。

ところが、いまから10年前（平成12年）映画部創立50周年記念式典の案内が郵送されて来たのです。その時、ぼくは東京支社勤務でしたが郵便物が届くということ  
は記録も少し残っていたのでしよう。

当時、東京支社のオフィスは、晴海通りに面した銀座5丁目にあり（当時ローカル局の東京支社が銀座に集中したのは、大手広告代理店が銀座にあつたためです）そこは映画監督、小津安二郎の遺作「秋刀魚の味」（昭和37年製作）の映像に出てくる不二越ビル（現在の銀座タワー）でした。

ビルの屋上には菓子メーカーの東洋一といわれた地球儀型のネオンサインが、銀座の象徴のように設置されていました。「自分が通勤しているビルが、日本を代表する映画監督の一人、小津安二郎の映画に出てくるなんて何とステータスなことだろう」と思いながら毎日、東京支社へ通勤していました。

東京支社勤務の7年半は、ぼくにとつて夢のようなひとときでした。「何が？」と言えば、本社（青森市）勤務の時、ラジオ番組などで面識がなく、電話でだけやりとりしていた人たちに対面できたこと。映画を通して東京の新しい友達ができたこと。また、勤務は「ナイントウファイブ」（午前9時〜午後5時まで）で基本的に終るので、「アフターファイブ」（午後5時以降）の映画スケジュールが立てやすいことなどです。

いまは、東京都内の劇場も郊外型のシネコン（シネマコンプレックスの略、ひとつの映画館に複数の小規模映画館があり、それぞれ別の映画を上映するシステムのこと）が増えていますが、10年前、銀座には封切館のほか、名画座もありました。

マリオン（銀座のシネコン）、シャンゼリゼ、銀座文化、シネスイッチ銀座、並木座、銀座シネパトス・・・など。また、日本ヘラルド映画の試写室、ユーアイビーUIPの試写室、京橋のフィルムセンター、東宝東和、東宝本社の試写室があり、今晩はどここの映画館へ、どこの試写室へとスケジュールを立て、それを消化するのが楽しみでした。

銀座は、地下鉄を利用すると、20分くらいで渋谷、新宿、六本木、池袋へ行けます。交通の便でも便利でした。

ぼくはその頃、一年間に劇場で100本の映画を観ようと決め、努力していましたが、仕事が予定通り終って、予定の上映時間に間に合ったことが多い年では、250本以上の作品を劇場で鑑賞できました。

会社の社長だったSさん（故人）も映画好きで、青森放送へ入社する以前は新聞記者だったことから、松竹に取材へ行つて小津安二郎監督にインタビューしたことが自慢話だったと秘書から聞きました。Sさんは、映画を観る劇場を決めると、その劇場によつて座る席を決めていて、必ず横をひとつ空席にするように指定席を二

つ秘書に予約させました。そんなSさんに社内のパーティーで、インタビューしたことがあります。

「社長は一年に何本くらい、劇場で映画をご覧になりますか？」と伺うと、社長はこう答えました。「鈴木君、いまは週休二日で土日が休みだろう。だから土日に7本の映画を観れば、週7日、一日一本観たことになる。これを繰り返していけば、一年に365本の映画を観ることができなんだよ」。ぼくは、自分の頭の中で考えてもいなかったことを聞いただけに、驚くとともに尊敬してしまいました。また、オンエアチェックのビデオテープはVHSの時代に、ベータマックスにこだわり、DVDディバイディのことは知らずに逝かれましたが、LDレーザーディスクが全盛の頃「LDは大きくて持ちにくい」と言ってベータマックスのセル版を買い求め、自宅前の敷地に総二階建ての家を新築して映画ライブラリーにするなど、「Sさんは自分のシネマテーク」を持っていました。

ひよつとしたら、Sさんが会社のステータスのために不二越ビルを借りるように

決めたのではないでしようか？。

ところで、大学のクラブ「映画部」50周年の案内が届いて10年がたち、今年（平成22年）60周年記念式典の案内が届きました。

（了）  
伸

平成23年1月